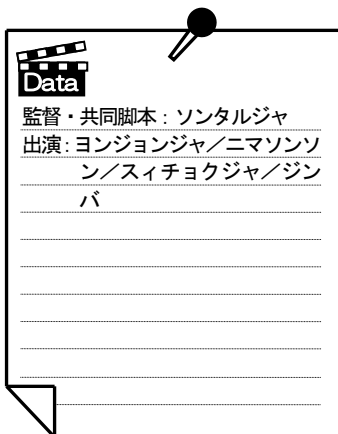




👁️👁️ みどころ

日本人が一番好きな中国映画は『初恋のきた道』(00 年)と『山の郵便配達』(99 年)だが、それはなぜ?何でも説明調のくだらない邦画が増えている昨今、『草原の河』(15 年)で「日本で初めて商業公開されたチベット人監督」になった、ソントラルジャがさらに成長!この素朴さ、この風景、そしてこの人情のあやに注目!

聖地ラサへの巡礼と「五体投地」は中国第六世代監督の旗手・張楊(チャン・ヤン)の『ラサへの歩き方 祈りの2400 km』(15 年)で学んだが、本作ではそれと違う視点から、この夫婦、この父子の確執とその解消のサマを学びたい。今の日本では、こんな映画の製作はもはや無理・・・?

—— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— *

■□チベット第一世代監督は『草原の河』から更に成長!■□

本作を監督、共同脚本したのはソントラルジャ。1973年に「草原のチベット」とも呼ばれるチベット東北部アムド地方、青海省海南チベット族自治州の同徳県に生まれ、牧畜民の中で育った男だ。奨学金を受けて北京電影学院撮影科を卒業した後、長編第二作の『草原の河』(15 年)が注目され、「日本で初めて商業公開されたチベット人監督」になった。同作は6歳の子供と母親との関係、父親と祖父との関係に焦点を当てた「家族の物語」で、日本で大人気の中国映画『初恋のきた道(我的父親母親)』(00 年)、『シネマ 5』194 頁)や『山の郵便配達』(99 年)、『シネマ 5』216 頁)と同じように、シンプルかつ素朴で味わい深いものだった(『シネマ 44』330 頁)。

同作で主演した6歳の女の子は第18回上海国際映画祭でアジア新人賞と最優秀主演女

優賞を受賞したが、本作では、中国ヤングジェネレーション映画祭およびシルクロード映画祭で最優秀女優賞を受賞している。彼の映画作りの素朴さは本作も全く同じだが、さて、本作のテーマは？

■□■ラサへの巡礼とは？妻はなぜそれを決意？■□■

『こころの湯』（99年）（『シネマ17』162頁）、『胡同のひまわり』（05年）（『シネマ11』192頁）、『グオさんの仮装大賞』（12年）（『シネマ32』62頁）等のすばらしい映画を監督しているのが、賈樟柯（ジャ・ジャンクー）、張元（チャン・ユアン）、婁燁（ロウ・イエ）等と並ぶ、中国第六世代監督の旗手の一人である張楊（チャン・ヤン）。これらはいずれも劇映画だったが、誰もが「これはドキュメント映画！」と錯覚してしまうほどドキュメンタリ的手法をたくさん取り入れて監督した映画が、彼の『ラサへの歩き方 祈りの2400km』（15年）だった（『シネマ44』265頁）。そこではタイトル通り、チベットの小さなプラ村から聖地ラサへとカイラス山への2400kmの距離を“五体投地”をしながら、ほぼ1年かけて歩く姿が描かれていた。

それに対して、本作では、病院で医師から何らかの宣告を受けた妻ウォマ（ニマソンソ）が、いきなり夫のロルジェ（ヨンジョンジャ）に対して、ラサへの巡礼の旅に出る、と打ち明けるシークエンスから始まるが、それは一体なぜ？ロルジェとウォマが住んでいるギャロン村は、チベット自治区ではなく四川省の省都である成都の北西にある村だから、『ラサへの歩き方 祈りの2400km』で登場した出発地のプラ村より更に遠そうだ。理由を明確に言わないまま急に「ラサ巡礼」を宣言したウォマに対して最初は反対していたロルジェも、ウォマの決意の固さの前に渋々（？）納得。ウォマは旅の前に久しぶりに実家を訪れたが、そこには亡くなった前夫との息子ノルウ（スイチョクジャ）が暮らしていた。ノルウは自分を祖父母に預けたままロルジェと再婚してしまった母親にわだかまりを感じ、部屋に閉じこもったままで、今もそれは変わっていないから、ウォマは当然それが気がかりだ。しかし、ラサ巡礼の決意が固いウォマは、そんなノルウに後ろ髪を引かれながらも、実家を後にすることに。

そして、今日はロルジェの見送りを受けてウォマがラサ巡礼に出発する日。五体投地の必需品たる「手板」はロルジェの手作りのものだし、村の娘2人が同行するから、多少の不安はあるものの何とかなるだろう。そう思っていたが・・・。

■□■旅をやめろ！病院へ行け！勝手にしろ！その顛末は？■□■

近時の邦画はテレビドラマ並みの「何でも説明あり」だが、本作ではウォマが医師から何を宣告されたのか？なぜウォマが急に（？）ラサ巡礼を言い始めたのか？なぜウォマが出発前に実家に戻り、ノルウと会ったのか？等について何の説明もない。しかし、出発してから数日後、バイクを飛ばして追いかけてきたロルジェが、「旅をやめろ！病院へ行け！」

と激しく問い詰める姿を見ると、観客には当然ウォマの病状の重さが伝わってくる。さらに、同行していた娘も近くの村に行ったり戻ってこない状況下にもかかわらず、「ひとりになっても巡礼を続ける」と言い張るウォマに対して、堪忍袋の緒が切れたロルジェは遂に「勝手にしろ！」との捨てセリフを残してバイクで走り去ることに。これはヤバイぞ。そう思っていると、その顛末は？

そこで、ウォマのもとに新たに登場してきたのが、ノルウを連れしたウォマの弟。何らかの決意でウォマがラサ巡礼に旅立ったことを知ったノルウは、母への思いを率直に言い出せないものの、「母に会いたい」一念でここまでやってきたことは明らかだ。さらに、そこにロルジェも戻ってきたが、さあ、ここからラサへの巡礼の旅はどうなるの？

本作では、ソントルジャ監督がその目が気に入ったことで、1000人ほどの小学生の中から選んだという少年スィチョクジャ演じるノルウの無口さと頑固さが際立っているが、ここでノルウは「一緒にラサまで行きたい」と言い始めたから、アレレ。そのテコでも動かない姿勢に、母に会わせたら連れ帰るつもりだった弟は、音を上げて一人帰っていくことに。他方、一時は「勝手にしろ！」とまで腹を立てていたロルジェも、今は父親の世話を第三者に委ねてまでウォマとノルウと共にラサへの巡礼の旅に出る決意を固めることに。すると、その旅の中、この3人の間にあった“わだかまり”はすべて順調に解消していくの・・・？

■□■夫と妻の確執は？父と息子の確執は？旅は続くの？■□■

前述のように何でも説明調の邦画と違い、本作では何の説明もされないが、ストーリー展開をみていると、この夫と妻の間に、そしてこの父親と息子の間にそれぞれどんな確執があるのかが少しずつ見えてくる。それは、母と子が離れていても、あの村で夫婦が生活していれば、表面に出てくることはなかったのかもしれない。しかし、3人で一緒にラサ巡礼の旅に向かっていくと、一方では3人の心が少しずつ結びついていくものの、他方では時としてその確執が噴出してくることに・・・。

夫婦間の確執は、ある夜ウォマが自分が巡礼の旅に出た理由をロルジェに話したところから明白になってくる。それは、亡くなった前夫との約束に基づくもの。そう聞かされたロルジェの気持ちがちまちま複雑になっていったのは当然だろう。さらに、迫りくる病魔に勝てず、ある日ついに倒れこんでしまったウォマが、前夫の遺灰でつくった仏像（ツァツァ）の入った箱を息子のノルウに託し、「お前がラサに持って行って」と話す姿を見ると、ロルジェの気持ちはなお一層複雑に・・・。

旅の途中で倒れたウォマを医者連れて行ったり、お寺で葬ってくれた親切な男・ダンダル（ジンバ）と出会えたのは、ロルジェにとってラッキーだった。しかし、そこでロルジェは、妻が大事に持っていた前夫との写真を一度は寺の壁に貼って納めたものの、思わず写真を破り、前夫とウォマを別々の場所に貼り直したが、それは一体なぜ？また、ウォ

マがいなくなってしまうと、何の血縁関係もないロルジェと前夫の息子ノルウとの間の確執が露わになったのは仕方ない。そんな中、「母さんは先に村に帰った」と嘘をついたロルジェに、ノルウが強く反発したのは当然だ。もともと、ウォマの供養の灯をとす中で美しい灯明の花が咲いたのは、亡くなった人が来世でより良い境遇に生まれる兆しだから幸いだった。ところが、ノルウを村に帰し一人でラサへの旅を続けようとするロルジェに対して、ノルウは母との約束を守るため「ラサへ行く」と頑なに拒んだから、遂にロルジェはノルウに対して手を挙げる事態に。すると、それに対しノルウも「あんたは僕が嫌いだ。僕が邪魔だったんだ」と叫ぶことに。コトここに至れば、事態は最悪だが、さあラサへの旅はこの後も続くの？

■□■聖地ラサが目前に！そこでは父子の確執は解消？■□■

『ラサへの歩き方 祈りの2400km』では、約1年間を要したラサへの旅をドキュメント風に撮影していたから、その作業が大変だった。しかし、本作はそれを描くのが目的ではなく、ロルジェとウォマそしてノルウ、三者三様の心のあやを描く中で、チラシやパンフレットに書かれているように、「妻から夫へ、父から息子へ。受け渡され、継がれていく巡礼の旅。」を描くもの。

本作はウォマが亡くなった後、ノルウと同じように母親を亡くし路頭に迷う子ロバがノルウにまわりつく中、まるでウォマの代わりのように、一緒にラサへの巡礼の旅に向かう姿が印象的。しかして今、ロルジェとノルウそして一頭の子ロバは「いよいよこの山を越えれば、その向こうがラサ」という地点までたどりついた。そこでロルジェは一気に聖地まで進むの？それとも・・・？

私たち日本人はチベットのことも、聖地ラサのこともほとんど知らないから、本作のパンフレットにある、星泉氏（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授）の「ソントルジャ監督が本領を発揮した秀作、その背後にあるもの。」と題された映画の背景を読み込む必要がある。それによって「遺灰と聖地巡礼」のことがわかるし、劇中で歌われる「ともに酒を酌み交わそう」の意味もわかるはず。また、「何のために祈るのか」という本作本来のテーマも、これを読むことによってより正確に見えてくるはずだ。もちろん、映画を観ているときにはそんな映画の背景は読めないが、そこで、「きれいにしてラサに入ろう」とノルウに語りかけるロルジェの姿をみていると。なんとなくわかるような・・・。そこでは、この父子の確執は既に解消しているの？

それに続いては、ノルウの頭を洗い、髪を切るシークエンスになっていくが、そこで切った髪はどうするの？そのことの意味は？他方、そこでロルジェが発見したのは、ノルウが大切に持っていた前夫とウォマの2人が写った写真。これは、俺があの時、あのお寺で、真ん中から破り、別々にはりつけていたはず。それなのに、なぜそれがもう一度貼り合わされたうえ、ノルウの手元に大切に保管されているの・・・？

さあ、本作ラストはソントルジャ監督が描く、そんな心のあやをタップリと。

2020（令和2）年1月20日記